

# J.ストラットの 『イギリス国民のスポーツ と娯楽』

講師（体育学担当）萩原 美代子

本学所蔵の稀観本の中には、イギリススポーツ史研究上重要な文献の一つにあげられている、ジョセフ・ストラット(Joseph Strutt, 1749-1802)の『イギリス国民のスポーツと娯楽』(The Sports and Pastimes of the People of England)も含まれている。しかも、1801年の初版と1810年の第2版の2冊がそろっている。両者の内容に相違はないが、第2版の方が50数頁多い。それは、活字が大きくなったことと、行間にゆとりをもたせたことによっている。更に、第2版の活字は、現代的になり、注の書式も改められて、私たちに読みやすくなっている。両版ともに、図版39枚が本文中に入れられており、本文の理解にも大変役立つが、それらには美しい手彩色が施されており、それだけ眺めても楽しい。

本書の標題は、正しくは前述のあとに、『初期の時代から現在までの田園と家庭の娯楽、5月の遊戯、仮装無言劇、野外劇、行列、華やかな見せものを含む』と続くのである。このタイトルからも、非常に多岐にわたった活動が含まれていることは想像できよう。ストラットは、50数頁に及ぶ序説で、まず、イギリスにおけるスポーツと娯楽の一般的な歴史を時代を追って概観し、次の4領域への分類を試みている。つまり、①身分あるものによって行なわれる田園運動(rural exercise)——狩猟、鷹狩り、競馬、②一般に行なわれる田園運動——アーチェリー、石・やり・ハンマー・輪投げ、フットレース、レスリング、水泳、スケート、ボート、セーリング、ハンドボール、ストウールボール、フットボール、クリケットなどの種々のボールゲーム、③町・都市、それに隣接する地域で行なわれる娯楽——馬上やり試合、吟遊詩人、道化師、奇術師、ダンス、動物の見せもの、動物の力

くらべ、ボウリング、ビリヤード、闘鶏、あひる狩り、リス狩りなど、④さまざまな種類の家庭娯楽、および特定の季節に行なわれる娯楽——音楽、さいころ、チェス、ドミノなど、お祭りや年中行事、子供のゲーム、名も知れぬ娯楽、以上4領域である。分類は、田園・都市・家庭内という空間的・地理的広がり、と、階級差という2つの視点によっている。ここでいう身分のあるものというのは、主として貴族・地主階層であるが、彼らは、乗馬、鷹狩り、狐・うさぎ・牡鹿狩りなどをして野山を駆けめくり、レスリングやフェンシングなどの武技に磨きをかけ、ダンス・ボウリング・ランニングなども楽しみ、地方毎の民衆の諸行事のバトロンでもあり、産業革命以前のイギリスにおける運動の洗練された担い手であった。しかし、田園における彼らの運動生活は、たとえば狩猟法(Game law)が端的に示しているように、民衆の狩猟を禁じる広大な地域を設定し、彼らを排除した空間で行なわれるのが常であった。スポーツは、ある特定階層の生活と深くかかわっていた。Sportの語が意味するところは、単なる気ばらし、娯楽といったことから、17~18世紀には、「動物、獲物、あるいは魚などを殺したりとらえたりする努力によってえられる気晴し」となり主として「狩り」を意味していた。狩りができるのは、広大な土地所有者であり、「スポーツ」は、レジャークラスの地位のシンボルでもあった。19世紀に入ってから、スポーツ概念は、「とりわけ、競技的性格をもち、戸外で行なわれるゲームや運動に参加すること、そのようなゲームや娯楽の総称」となり、私たちが現在イメージするスポーツの意味と重なってくるのである。

スポーツに関する中世研究は、一般史における

それと比較して、はなはだ乏しいというのが現状である。近代スポーツ成立という視角で、あるゲームの中世から近代への移行過程をみたとき、無秩序から組織化へというとらえかたが、おうおうにしてなされてきた。しかし、一方で、スポーツやゲームにおける中世の意味を問い直すという研究も進められてきている。中世を単なる近代への準備段階とみるのではなく、それ自体独自の意味をもつ生きた実体としてとらえようとする方向である。そういった研究の際に、本書は、イギリスにおける先駆的なスポーツ史研究の書であるからというばかりでなく、具体性に富んでいるという点からも、今後も重要な意味をもちつづけるであろう。

ストラットにとって最大の関心事は、時代の流れが変化しても変わりにくい、人間の最もソフトな部分、すなわちイギリス人の自然の性向(natural desposition)を真の状態で明らかにすることであった。彼は序説の冒頭で、「ある特定の国民の性格について正しい評価を構成するには、彼らの間に最も広く見られるスポーツと娯楽を研究することが絶対必要である」と述べ、「この国でもつぱら習慣的に行なわれてきた娯楽だけをとり扱う」とも述べている。そして、その背景には、そういう

部分にこそ、イギリス人の本質がかくされているという信念があるのである。それは、彼の他の著作をみると、より明確になるであろう。本書執筆以前に、彼は次のような著書を残している。注

①古代イギリスの王・聖職者の風習 (The regal and ecclesiastical antiquities of England 1773)

②イギリス国民の風俗習慣・武器・服装 (A complete view of manners, customs, arms, habits & c. of the people of England 1774-6)

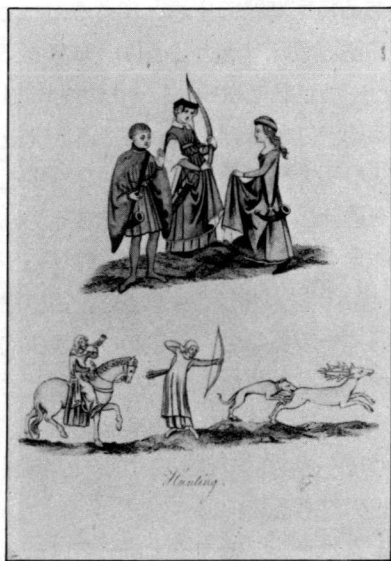
③イギリス年代記 (Chronicle of England 1777-8)

④イギリス人の衣服と習慣の全容 (A complete view of the dress and habits of the people of England 1796-9)

彼がイギリス社会を、戦争や政治・経済といった事実によるよりも、風俗習慣、服装、武器、娯楽スポーツといった事実によってとらえることに力を注ぎ、一般の歴史家が顧みない、そこにこそひとびとの自然の本質があると考えたことが、十分にうかがえるであろう。

注：図書館には、①1842<383.133-S>、②のフランス語版 1789<382.33-S>、および④1842と1970(複製版)<383.133-S>がある。

①狩猟は身分の高い人々が行なつたが、男性に限られることはなく、女性も好んで参加した。



②中世の武技訓練の一種、やりでまとを突く練習。上段は、まとを突いたあと、他端の砂袋で背を打たれないように体をかわすというもの。

